

19世紀末米国の「国際化」を越えて

—Stephen Crane、教育、外国語

増 崎 恒

Beyond the “Cosmopolitan” America in the Late Nineteenth Century:

Stephen Crane, Pedagogy and Foreign Languages

Ko Masuzaki

はじめに

母国語以外にも複数の「外国語」を操る人物、受け手の母国語とは異なる「外国語」を話す人物、について書かれた英語がある (Conklin 42; 8: 348)。^{注1}

That man speaks four languages.

He uttered a low cry in his foreign tongue.

これらを繋げて読むとき、特段の違和感は生じない。前者は1888年に刊行された英文法・英作文学習書の中の例文、後者は米国自然主義文学を代表する作家 Stephen Crane (1871-1900) による1894年の短編中の一文である。ジャンルも書き手も異なる二文の自然な結合は、両者がそれぞれ舵を切る、「教育」と「文学」のベクトルが19世紀末米国に持ち得た親和性を窺わせる。更には、「外国語」をめぐる当時の社会文化的な文脈を両者が共有していた事実、その読者にして「英語」を（米国の優越言語として）解する同時代の米国人が外国語と対峙していた実情、が

1 Crane の作品の引用は全て、ヴァージニア大学出版『Stephen Crane 全集 (Fredson Bowers 編、全10巻)』による。巻数と頁数を括弧内に併記する。

仄めかされる (Mayo-Smith 74)。^{注2} これを小論の論議の出発点とする。Crane は外国人 (及び彼らが話す外国語) へ関心を寄せる。作品は英語文学教材としての役割を果たす (増崎, 「英語文学と英語教育の接合」 59-78)。この前提に沿って、文学研究の方法論に軸足を置きつつ Crane 作品を教材として捉え直す。彼 (の作品) が国際化の進展する 19 世紀末米国社会の内で (むしろ、それを飛び越えて) 発信する教育的メッセージを掘り起こす。小論では「国際」を、特定の一国で完結するのではなく複数の国家や諸地域、すなわち外国と相互に関わっている状態を指し示す用語として使用する。特に、先の (教育的、文学的な) 二文が共通に示唆する、英語と (複数の) 外国語の混在とそれを紐付ける。

日本における外国語 (英語) 教育における文学教材の有効性を議論する著作が 2015 年に日本で刊行される。その中で、「近年の日本の英語教育ではオーセンティック教材の概念が狭く解釈された結果、文学が排除されるという極端な事態が生じているため、この事態を改善する必要がある」と指摘される。また、「文学は英語によるコミュニケーション能力育成のためのオーセンティック教材として効果的であることに加えて、より豊かなコミュニケーション能力を身につけるために適し」ている、と文学の復権が唱えられる (高橋 3)。一方、2019 年版『子供・若者白書』は、今日の (小・中・高等学校、及びそこでの学びを土台とする大学、に在籍する) 「日本の若者」を「グローバル」化が進む「国際社会の一員」と同等視し、「英語教育」を念頭に置いた「外国語教育の推進」、「諸外国との相互理解の増進」の必要性を声高に叫ぶ (内閣府 217, 223)。小論はこの主張を踏まえる。複数言語が当たり前のように混在する国際状況について学習者の理解を深めさせる英語教材、外国語 (人) を受容し英語コミュニケーション能力を醸成する英語教材、として Crane 作品を日本の教育現場で活用する方法を探る。21 世紀の日本における、英語教材としての適用可能性を検証する。遡って、国際化が進展する 19 世紀末米国で彼 (の作品) が読者を教育する役割を担った、と結論付ける。

Crane は 1893 年に単行本第一作、中編 *Maggie: A Girl of the Streets* (以下、*Maggie*) を出版する。1896 年の手紙で彼は、“I had no other purpose in writing ‘Maggie’ than to show people to people as they seem to me.”、と述べる (Wertheim & Sorrentino, *Correspondence* 671)。「人々 (の生活)」を読者に「見せ」るために作品は書かれている。実に、1890 年代という時代において、万物を「視覚の対象」として見せる身振りは「博覧会」に備わる教育的目的と接続する (高山 363-65)。この連続性に照らすとき、先の手紙は「見せる (=教育する)」意図の表明に等しい。*Maggie* の同年、Christopher Columbus による＜アメリカ＞発見 400 周年を記念する万国博覧会 (以下、万博)

2 以下、米国 (の言語) に言及する際、英語以外の言語を単に「外国語」と小論では表記する。また、米国人を中産階級米国人と同等視し、小論では単に「米国人」と表記する。なお、Crane が想定する読者は、米国の主流派を占め、英国にルーツを認め、英語を優越言語と自認する (ワスプに連なる) この米国人に等しいという前提で論を進める (増崎, 「＜模造＞ダイヤモンドは輝くか?」 13)。

が米国のシカゴで開催される。*Crane* の意図は万博（の持つ教育的意図）と連動する。作品を「書く」行為を支える基本的スタンスとして広く複数の作品に波及していたと考えられる。例えば、*Maggie* の続編的中編 *George's Mother* はニューヨーク（以下、NY）市中の大通りをゆき交う人々（の生活の一場面）を読者に見せる冒頭部で始まる（1: 115）。

万博は別名、「世界コロンブス博覧会」（the World's Columbian Exposition）と呼ばれる。「世界」（world）との相互依存の下、この万博は成り立つ。その事実が強調される。実際、1893年に刊行された万博公式ガイドは「国際的な米国」（cosmopolitan America）を称揚する（Flinn 7）。米国一国主義は脇へ追い遣られる。外国（世界）を無視し辛い状況に米国は留め置かれる。*Maggie* 刊行、万博開催、と併行してNY市で「外国語」（foreign language）の1つ、「フランス語」の学習書が出版される。同書は巻末に、フランス語（の会話、作文）だけでなく、「イタリア語」、「スペイン語」、「ドイツ語」の外国語学習書の広告を載せる（Berlitz iii, 139）。*Maggie* は「イタリア人」と「ドイツ人」をNY市中の風景の中に描き出す（1: 20, 30）。彼らの使用する外国語（＝イタリア語とドイツ語）が英語を優越言語とする米国に入り込む。それが米国人の耳目に広く届いていた実状が暗示される。同時代米国の外国語への関心と結合する *Maggie* と万博の構図、が導かれる。それに着目する。これらを基にして、*Maggie*、万博、フランス語（等の外国語）の学習書、読者を紐付ける。*Crane* は自作品を通して、「外国語」の使用実態に（米国人）読者の目を向けさせる。その上で、彼らの教育を企図する。教育（者）的な立場から作品を著していたのではないか。「イタリア語（人）」を鍵として、この仮説の証明を以下で試みる。

小論の構成は次の通りである。作品をそれが書かれた時代に置いて考察する、文学研究的アプローチから、作家と教育の関係を論究する。作品を基にして作成された教材（ワークシート）を21世紀の日本において実践する、教育学的アプローチから、作品が持つ教育効果を測定する。両アプローチを取り交ぜて、*Crane*（の作品）と教育の繋がりを詳らかにする。作品に施された教育的な仕掛けの実態を解明する。時代を越えて、グローバル化が進む21世紀の今日、それが未だに色褪せないことを証明する。その上で、英語教育における英語文学作品の適用可能性という文脈に置き直して、*Crane* が表明する意図を再評価する。^{注3}

3 2020年度の第92回日本英文学会全国大会では、英語文学作品を英語教育学的な視点から論じる研究発表が3件、シンポジウムが1件、企画されている（日本英文学会 18-19, 54-55）。新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大により大会はウェブカンファレンスに変更され、当初通りの開催は叶わなかった。しかし、これらの研究発表とシンポジウムが準備されていた事実を鑑みるならば、小論は時宜に適っていると言える。

1. Crane と教育、外国語

以下、Crane、教育、外国語の交接について考究する。手始めに、Crane 研究において見過ごされてきた、1888 年（に起きた一連の出来事）を取り上げる。それが作家の思考形成に影響を及ぼした、と見る。同年、英文法・英作文学習書が米国人向けに刊行される。同書は、例文 “That man speaks four languages.” を含む (Conklin 42)。複数形の languages が使用される。「(英語と外国語から成る) 複数言語」が強調される。教育的に適切で、かつ同時代米国を映す機能を果たしていたと見て構わない。とすれば、複数言語を話す人物が当然存在する。この人物に具現化される複数言語の混在が米国で生じる。それに対応する必要性に米国人は駆られる。反復・習慣を意味する現在時制の動詞 speaks を例文は伴う。複数言語は、「あの男」で表される「匿名」の人物によって「日常的」に使用される。不特定多数の複数言語話者を抱える米国社会の実情、外国語を取り巻く米国の社会状況が浮き彫りになる。

同年、Crane は Claverack College and Hudson River Institute に進学する。併行して、新聞社にニュースを提供する仕事に就いていた兄を手伝って、米国人で賑わう海辺のリゾートを取材し始める (Wertheim & Sorrentino, *Crane Log* 42, 44)。その傍ら、兄がまとめた記事の掲載先、*New York Tribune* 紙上に米国人にフランス語、ドイツ語、ラテン語等の複数の外国語を教える「語学学校の広告」が踊る (The Berlitz School of Languages)。よって、次の事項は限りなく事実に近いと推察される。作家は学生として教育に近い場所にいた。教育の実態に当事者意識をもって接していた。また、授業を受ける過程で、外国語に関する (1888 年の英文法・英作文学習書に収録された例文と酷似する) 例文が彼の意識下に刷り込まれた。更に、作成に助手として参与した記事が掲載される新聞の紙面の一隅を占める語学学校の広告越しに、書き手の側から (記事の) 読者、リゾート (客)、語学学校 (の需要)、の三者の結合を彼は見た。1888 年は彼の教育への関心の方向性を決定付ける転機の年になる。

事実、2 年後の 1890 年、“It has become an exceedingly popular notion of late years to found summer schools at seaside and mountain resorts, so that people in their thirst for knowledge might combine the cool breezes from hillside or ocean with useful instruction and entertainment.”、“[O]ne may see—and learn a great lesson from the sight—a man [...] wending his way with his books to the Hall of Philosophy to take a lesson in French.”、と彼はリゾート (客) について書き連ねる (8: 502 以下、引用の下線は全て筆者による)。リゾート客が有する旺盛な「知識欲」(thirst for knowledge)、それに応じる「学校」(schools) の開校、「フランス語講座」(a lesson in French) を受講するリゾート客、を彼は取り上げる。同年、在籍する Lafayette College で (外国語の 1 つ) フランス語を履修して彼は合格している (Wertheim & Sorrentino, *Correspondence* 29)。1888 年を経て 1890 年に至る中で、米国人の外

国語への知識欲、（それを下支える）外国語の流入と外国語使用の米国内での広がり、それに対する気付き、が彼の中で教育的な文脈と交差する。その様相を窺い知ることができる。

この交差と絡めて、1896年と1897年のCraneの手紙に目を向ける。“I decided that the nearer a writer gets to life the greater he becomes as an artist, and most of my prose writings have been toward the goal partially described by that misunderstood and abused word, realism.”、“I let the reader to find it [any moral or lesson] for himself.”と彼は書き記す(Wertheim & Sorrentino, *Correspondence* 232, 323)。「書き手」(a writer)は(文学の狭い領域を越えて広く)「現実へより接近」する必要があるとし、「(目の前の社会と人間の関係性を描出する)リアリズム」の立場から現実、とりわけ身近な「外国語(の教育)」と「国際的な米国」の結合、を彼は直視する。その裏面で、作品に仮託された教訓等の意味(や有無)を読者の解釈・判断に委ねる。彼は「これ」という正解を示さない。代わりに、読者がそれを「発見」する。これらの手紙の文面は、作品執筆に際して、文学の枠内に収まらない書き手と自認する作家が信条とする、文学的よりもむしろ教育(者)的な意図を映し出す。教育者として読者に「現実」(life)について思考させる。読者に思考の材料を提供する教材と作品は位置付けられる。この意思表示を目聡い書評家は汲み取っている。1896年の書評記事は、“[Crane] offers no solution; he does not even state the problem. He simply turns on the light, and we perceive at once what the actual conditions of life are to the other nine-tenths, in New York.”とCrane作品の特徴を指摘する(Weatherford 171)。問題と答えが両方とも隠される、明かりが点く、読者が問題と答えを見付け出す。この過程越しに、読者に「思考」を促す教材的な側面を作品は備える。(Craneが自作品に織り込む)「見せる」意図と書評は連動する(Wertheim & Sorrentino, *Correspondence* 671)。

関連して、1897年の手紙で、“I try to give to readers a slice out of life; and if there is any moral or lesson in it, I do not try to point it out.”とCraneは述べる(Wertheim & Sorrentino, *Correspondence* 322-23)。作品を通じて、「生活の断片」(a slice of life)が与えられる(=見せられる)。その解釈・判断は読者に委譲される。作品は「生活の断片」の集合体であり、外国語に言及する部分(=実生活の一コマ・コマ)のみを切り離して読んだとしても、その部分に埋め込まれた作家の教育的意図は損なわれない、と彼は認める。Crane(の作品)の本質がここにある。この前提に則り、以下、作品を複数取り上げて、「外国語」(と英語の混在)に直接間接的に言及する箇所を抜き出す。英文法・英作文学習書の中の例文と同等に、それらを「教育」的な意図を持つく自立し独立した言語表現>とみなして考察を進める。

2. Crane 作品と教育、外国語

1896年の手紙で、見せる意図をMaggieの中で実践しているとCraneは語る。ならば、彼が「見せる」「生活の断片」の中心は、その舞台NY市中に他ならない。そこを拠点に、周辺へと対象

を広げていったと推定される。米国のジャーナリスト Jacob Riis は NY 市中を取材し、その成果を 1890 年のルポルタージュ *How the Other Half Lives* にまとめている。同著作は *Maggie* に多大な影響を与える (Gullason 499-500)。Crane の教育的思考、それを自作品へ織り込む行為、自作品を教材とみなす作家の目、が多分に Riis に負っていたことは想像に難くない。1892 年、*Maggie* 出版の前年に作家はリゾートで催された「講演」を取材する (Wertheim & Sorrentino, *Crane Log* 76)。その後に書かれた新聞記事の中で、“Jacob Riis, the author of *How the Other Half Lives*, gave an illustrated lecture [...]”、と Riis (の講演) と合わせて、彼の著作名に作家は言及している (8: 514)。著作とセットで「(教育的な) 講演」が「与え」られ、リゾートの目玉の出来事として喧伝される。講演と著作の双方に飛び付く (Crane を含む) 米国人の熱狂が垣間見える。教育に対する作家の複層的な関心が透ける。この文脈で、教育と Crane の連環に Riis が密接に関わる。Crane 作品に入る前に、*How the Other Half Lives* に一寸目を向けてみたい。

その「序文」を Riis は次の段落で始める (1)。

Long ago it was said that “one half of the world does not know how the other half lives.” That was true then. It did not know because it did not care. The half that was on top cared little for the struggles, and less for the fate of those who were underneath, so long as it was able to hold them there and keep its own seat. There came a time when the discomfort and crowding below were so great, and the consequent upheavals so violent, that it was no longer an easy thing to do, and then the upper half fell to inquiring what was the matter. Information on the subject has been accumulating rapidly since, and the whole world has had its hands full answering for its old ignorance.

NY 市中の貧困問題を眺める際の心構えが説かれる。急増する移民を背景に、以前ならば「知る」必要すらなかった米国における「あとの半分の人々の生活」(how the other half lives) で表される下層階級集団の現状を、「社会の上位を占め」る読者は今、「知る」必要がある。その一助として「昔の無知」を埋め合わせる知識を教示する、つまり同著作が帯びる教育目的が明示される。その目的の下、Riis は次のように NY 市を解説する (25 以下、引用の丸括弧と数字は全て筆者による)。

(1)

A map of the city, colored to designate nationalities, would show more stripes than on the skin of a zebra, and more colors than any rainbow.

NY 市には「多様な国籍」から成る人々が暮らしている。その様子は「シマウマの縞模様」と「虹

の色」に喩えられる。そこで生活を営む人々の外国属性が強調される。その先に彼らの言語、すなわち外国語（の多様性）が見据えられる。Crane（と米国人読者）はこの比喩を通して、米国の国際状況を認識するよう促される。Riis（の著作）から Crane が「（同時代米国を取り巻く外国語事情について）教」わったことは間違いない。これを足掛かりにして、作品が発表された時系列に沿って、Crane の短編、及び中編から数点を選抜し、外国語に言及する箇所を独立した「生活の断片」と見て抜き出す。そこから「外国語」と国際状況について思考させる教育的な仕掛けを炙り出す。その仕掛けを、各作品（の抜粋）を有機的に結合させ、連続させる要素とみなす。

NY 市中の路上の一場面を切り取る 1894 年の短編 “When Man Falls, a Crowd Gathers”（以下、“When Man Falls”）の中で、男と少年が「イタリア語」で会話している。（8: 345）。

(2)

The man and the boy conversed in Italian, mumbling the soft syllables and making little quick egotistical gestures.

両者には年齢の開きが見て取れる。しかし、それ以外の情報は、会話が行われている具体的な場所の名前や時間帯も、肝心の会話の内容さえも一切不明のままである。代わりに、イタリア語の会話における「音節」(syllables) と「仕草」(gestures) に子細な説明が加えられる。Crane は、発話者の正体、話されている会話の内容にではなくて、「イタリア語」に固有の特徴に読者の目を向けさせる。外国語の使用が（NY 市中の）路上の見慣れた光景に成りつつある事実を読者に気付かせようとしている、と考えられる。外国語の使用に関連して、NY 市における自転車ブームを取り上げる 1896 年の短編 “New Nork’s Bicycle Speedway” に着目する。その中で、「2 から 5 か国語」(in from two to five languages) で悪口雑言を吐く警官たちが描かれる、複数言語話者の姿に彼らは重なり合う（8: 372）。

(3)

The majority of the policemen along the Boulevard were very stout and could swear most graphically in from two to five languages.

警官たちの出自、階級、職種、生活拠点、等の情報は一切示されない。複数言語を話す警官たちを一括りにして、その集合的な姿を通して、外国語の使用が NY 市中で馴染みに成りつつある事実を読者に気付かせようとしている、と考えられる。

同様の風景は米国中西部の寂れたホテルにまで波及する。そこに集う人間模様を描く 1898 年の中編 “The Blue Hotel” は、ホテル客のみならずホテル経営者（= Scully）が帯びる外国属性、

その先に控える外国語の混在を（あたかも Riis に倣うかのように）示唆する（5: 142-43）。

(4)

Scully performed the marvel of catching three men. One was a shaky and quick-eyed Swede, with a great shining cheap valise; one was a tall bronzed cowboy, who was on his way to a ranch near the Dakota line; one was a little silent man from the East, who didn't look it, and didn't announce it. Scully practically made them prisoners. He was so nimble and merry and kindly that each probably felt it would be the height of brutality to try to escape. They trudged off over the creaking board sidewalks in the wake of the eager little Irishman."

Crane は Scully 以外を匿名にする。登場人物たちの外国的なラベルが一方的に強調される。スウェーデン人とアイルランド人を（東部出身の）米国人（と思しき人物）と絡めることで、米国の国際状況が一般化され、注視の対象と化す。外国人と米国人が同宿する設定越しに、ホテル経営者がホテル客を確保する日常に紛れ込む（国際状況と密接な関係にある）外国語の使用を読者に気付かせようとしている、と考えられる。関連して、同中編の中の次の会話、及びそれに続く説明文もまた看過できない（5: 151-52）。

(5)

"He ain't no Swede," said the cowboy scornfully.

"Well, what is he then?" cried Johnnie. "What is he then?"

"It's my opinion," replied the cowboy deliberately, "he's some kind of a Dutchman."

It was a venerable custom of the country to entitle as Swedes all light-haired men who spoke with a heavy tongue.

（スウェーデン人を除いた）ホテル客とホテル経営者の息子が交わす会話の中で、スウェーデン人はオランダ人と混同される。外国人（ここではスウェーデン人）に付随する「無口さ」（a heavy tongue）の中の「舌－言葉遣い－言語」（tongue）の意味の連鎖と相俟って、スウェーデン人が使用する「外国語」が会話に続く説明文を通して現前化する。「スウェーデン人－オランダ人」の変換図の延長上に、米国人とは異質な外国人、彼らの「外国語」、が「話す」を意味する動詞 speak の過去形 spoke とともに読者に突き付けられる。スウェーデン人－オランダ人－外国人に対する偏見の裏で、外国語の使用の実態と国際状況を、英文抜粋（以下、英文）(4)と同様に読者に気付かせようとしている、と考えられる。

このように、Crane 作品（の抜粋）は外国語に光を当てて読者の思考を誘う。この教育的誘導

は、作品が発表された 1894 年～98 年にかけて米国が経験した、米国人のカテゴリーの「埒外」(foreign)の「異分子」(aliens)にして「異なる言語」(different language)を用いる「移民」(immigrants)の急増に起因する米国の「混沌状態」(disorder)と無関係ではない (Mayo-Smith 34, 87, 88, 124, 166)。移民が米国にもたらす諸問題は単行本にまとめられて、Riis のルポルタージュと同年、1890 年に米国の経済学者によって出版されている。内容を変えず、同単行本は 1898 年に再版される。この期間、移民によって引き起こされた混沌状態に、米国社会全体が継続的に不安交じりの関心を寄せていた事実が窺える。同時代を生きる Crane は、読者に「人々 (の生活) を見せる」ことを目論む (Wertheim & Sorrentino, *Correspondence* 671)。作家が移民と米国 (人) を取り巻く同時代の社会情勢から目を背けていた筈がない。

移民を前面に押し出す、これらの本とルポルタージュと対照的に、「移民」は Crane 作品に一切現れない。(移民集団で溢れている筈の) 同時代の NY 市中を描く *Maggie* でさえも、その中に移民、それに類する表現は全く見られない。代わりに、「イタリア人」、「ドイツ人」、「英国人」、「(南アフリカに住む部族) ホッテントット人」という多様な民族ラベルを伴って NY 市中の人々は呼び表される。各人が帰属する国と地域が際立つ。加えて、その外国属性が強調される。しかも彼らは、「多様な国籍からなる人々」([t]he nationalities) と表記される (1: 20, 30, 71)。複数形の nationalities が使用される。1 つに収斂しない多様性が暗示される。同じ NY 市中を取り上げる “When Man Falls”、“New Nork’s Bicycle Speedway” の両短編でも同様に、作家は外国語を取り上げる反面、移民もそれに類する表現も一切使用しない。関連して *Maggie* 冒頭部を読み返す。「喚き声を上げる悪童たち」(howling urchins)、「飛び交う罵声」(the delivery of oaths) に焦点が当てられる (1: 7)。同作品は読者の「聴覚」に訴え、彼らの思考を誘導する。喚き声や罵声への言及は、「(特定の人物が発する) 言語」を浮かび上がらせる。Riis に倣 (習) う一方で、移民 (の生活や人間性) を取り巻く諸事情よりもむしろ、言語、とりわけ「(移民を含む外国人が使用する異質で多様な) 外国語」が米国内で英語と衝突した結果生じる国際状況が Crane の関心事であり、教育的意図の標的になっている。

これらを踏まえると、NY 市から遠く離れた土地を描く “The Blue Hotel” の別解釈が可能になる。1897 年、米国の雑誌に移民問題の特集した記事 “Immigration Question” が掲載される。実に「全移民の約 5 分の 4」が NY 港を通過して米国内に入ってきていると記事は伝える (Senner 2)。同時期、滞在先の英国で “The Blue Hotel” を Crane は書き進める (Wertheim & Sorrentino, *Crane Log* 282)。作中、スウェーデン人もホテルを経営するアイルランド人も移民と名指しされない。*Maggie* 等と同様に、移民もそれに類する表現も作品からは欠落する。1 度だけ、匿名で出自不明のスウェーデン人は NY 市と絡めて語られる。“[The Swede] volunteered that he had come from New York, where for ten years he had worked as a tailor.”、と「NY 市中」に 10 年間に住み洋服屋で生計を立てていたという経歴がスウェーデン人に与えられる (5: 144)。空間的に離れた英国から、米国を俯瞰して

眺める。NY 港を抱え、作家と所縁のある NY 市、多様な言語が入り乱れる国際状況、に Crane はむしろ触発される。

作中、スウェーデン人は米国東部出身の男とホテル内で会話を交わす。前者の発話、“They say they don't know what I mean.”、と後者の返答、“I don't understand you.” の間に互いの言語の相違、英語と外国語の対立、複数言語の混在、が顕在化する (5: 146)。この食い違いが物語の根幹と結末を成す。言語 (= 外国語) に向けられる共通の関心において、Maggie と “The Blue Hotel” は連続する。同一線上に、“When a Man Falls” と “New York's Bicycle Speedway” が並ぶ。独立した「生活の断片」に等しい英文 (2) ~ (5) は、外国語と国際状況を糊として結び付く。それぞれ独立した物語の本筋を別途維持しながら、抜粋した箇所でも互いに繋がり合う。(教材として) 自由に組み合わせられる。以下、ワークシートを実践し、「外国語」、及びそれと不可分の「国際状況」を読者に思考させ気付けさせる、Crane の教育的意図の有効性を検証する。その作業を通して、本節における一連の議論を補う。

3. Crane 作品と教育、外国語、ワークシート実践

前節で、Crane (と、同時代の読者が読んだと推測される Riis) の英文 (1) ~ (5) について考察を行った。Crane は外国語と国際状況を英文の中に織り込む。読者は自らの思考作業を経て、それに気付く。その仕掛けが実際に動作することを確認する目的で、英文を基に、筆者は次のワークシートを作成した (図 1)。英文 (4) に関して、途中の文の後半の一部とそれに続く冗長な説明文を、削除したとしても英文全体の意味が概ね変わらない、残すことで却って回答者の思考を散逸させ読み進める意欲をも損なわせかねない、という理由で省略した。それを除き、全ての英文に表記修正は一切加えず元のまま用いた。なお、「(略)」を付けて省略箇所は明示されている。

筆者が勤務する追手門学院大学の、国際教養学を学ぶ学部生 1 ~ 4 年生を対象にワークシートの Web 回答を依頼した。実施期間は 2019 年 10 月と 2020 年 6 月の 2 回、合計 124 名の学生から回答を得た。なお、回答者はいずれも英語文学の専門的知識を持ち合わせていない。

ワークシートの作成に際して、先入観による回答の偏りを避けるため英文の出典情報を一切伏せた。誘導質問にならないように注意しつつ、回答者の思考を補助する指示と下線を英文 (= 課題文) に添えた。和訳スキルの向上ではなくて、英文の背後に潜む (外国語を取り巻く) 諸々の社会文化状況を積極的に推量する「読み」を回答者が実践するよう留意した。「日本語でも同じ」で「簡単そうに見える文章ほど、じっくり読む必要」があり、「そこにはしばしば意味深さや、発見や、味わいや、ときには罣も隠されている」と見る (英文)「読解」の原理原則に筆者は従う (阿部 iii, iv)。このため、直訳的な和訳を英文に付けた。また、自由記述式、箇条書きで回答するよう求めた。

1.

A map of the city, colored to designate nationalities, would show more stripes than on the skin of a zebra, and more colors than any rainbow.

(和電)

国籍を示す色が塗られたとき、その市の地図はシマウマの模様よりも多くの縞と虹よりも多くの色を示すだろう。

☞ the city はどのような市であるか答えよ。関連して、下線部の喩えが持つ効果を箇条書きで答えよ。

2.

The man and the boy conversed in Italian, mumbling the soft syllables and making little quick egotistical gestures.

(和電)

その男と少年は、柔らかい音節をもごもごと言ひ、小さく素早い傲慢な身振りで、イタリア語で会話していた。

☞ 「その男と少年」について分かることを箇条書きで答えよ。

3.

The majority of the policemen along the Boulevard were very stout and could swear most graphically in from two to five languages.

(和電)

大通り沿いの太った警察官たちの大半は、ののしりの言葉を生き生きと2から5か国語で語れた。

☞ 下線部からうかがえる、警察官たちを取り巻く状況を箇条書きで答えよ。

4.

Scully performed the marvel of catching three men. One was a shaky and quick-eyed Swede, with a great shining cheap valise; one was a tall bronzed cowboy, who was on his way to a ranch near the Dakota line; one was a little silent man from the East. (略) They trudged off over the creaking board sidewalks in the wake of the eager little Irishman.

(和電)

スカリーは3人の客をつかまえる離れ技を見せた。1人はよろよろした、目ざといスウェーデン人、ピカピカ光る安物の旅行鞆を彼は持っていた。1人は背の高い日焼けしたカウボーイ、(米国の)ダコタとの境にある牧場に彼は向かう途中であった。最後の1人は(米国の)東部出身の、小柄で無口な男。(略) 全員、小柄なアイルランド人(スカリー)の後ろを、きしる板敷りの道を重い足取りで続いた。

☞ スカリー(Scully)はホテル経営者である。下線部に注意して、ホテルを取り巻く状況を箇条書きで答えよ。

5.

"He ain't no Swede," said the cowboy scornfully.

"Well, what is he then?" cried Johnnie. "What is he then?"

"It's my opinion," replied the cowboy deliberately, "he's some kind of a Dutchman."

It was a venerable custom of the country to entitle as Swedes all light haired men who spoke with a heavy tongue.

(和電)

「あいつはスウェーデン人じゃない」と馬鹿にしたようにカウボーイは言った。

「だったら何者だ？」とジョニーは叫んだ。「何者だ？」

「俺が思うに」とカウボーイは考えながら言った。「あいつはオランダ人か何かだ」

この国(米国)では昔からの慣例として、髪が明るい色で無口な男はみなスウェーデン人と呼ばれていた。

☞ 上の会話と説明文からうかがえる、スウェーデン人(Swede)を取り巻く状況を下線部に注意して箇条書きで答えよ。

6.

☞ 2～5の英文は同じ人物によって書かれた。その人物の職業・生活環境・興味関心、等を2～5の英文を根拠にして、箇条書きで答えよ。

図 1

回答の分析手順は次の通りである。各設問に対する回答を（回答者単位で要約して）類型化した上で、「国際状況への気付き」、「（複数）言語への気付き」の有無で仕分ける。^{注4} 続けて、その比率と特筆すべき個別の回答の抽出を通して、ワークシート（が取り上げる英文、ひいては Crane 作品）が備える、（複数言語、とりわけ外国語と優越言語＝英語をめぐる）国際状況を読者に思考させる教育効果を評価する。設問ごとに類型化された学生の回答の比率を以下に示す（図2）。

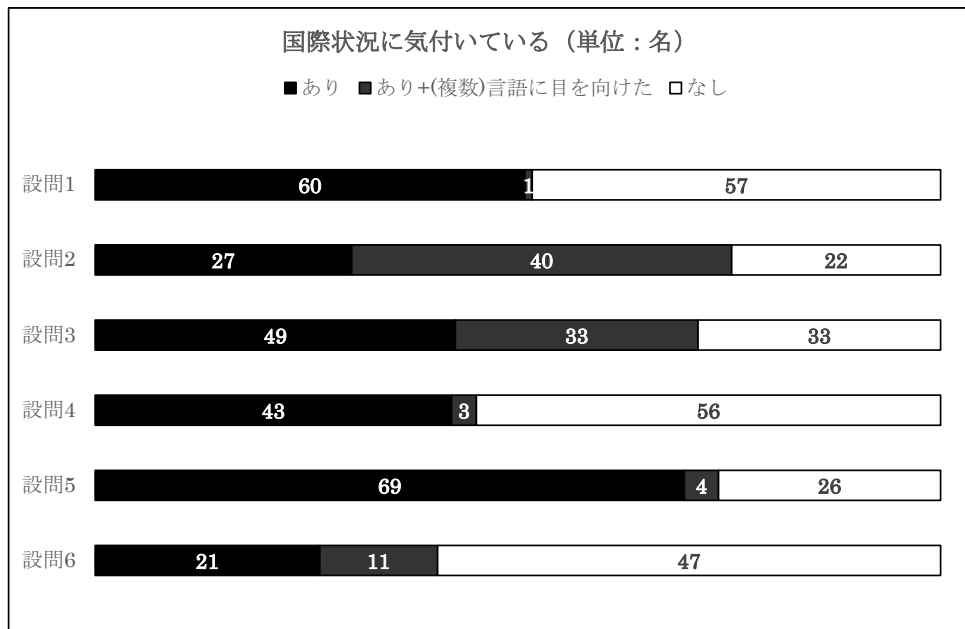


図2

設問4と6を除いて、半数以上の学生が英文を読んで「国際状況に気付いた（それを英文から読み取った）」と分かる。次に、それに気付いた上で更に「（複数）言語に目を向けた（それを英文から読み取った）」学生数が設問2と3で突出する。それぞれ、「イタリア語」、「2から5か国語」、と言語（外国語）に注意を向けさせる鍵文字が課題文中に目立つ形で出ていたことに起因すると想像される。

一方で、国際状況と合わせて、言語的要素にも気付いた学生が設問1に1名、設問4に3名、設問5に4名いた。この数値は低いものの、回答としてゼロでなかった事実を無視できない。これらの英文から直接的に言語的要素は導き難い。段階的な思考が必要になる。例えば、設問1

4 国際状況への回答者の気付きを判断する基準は、「多（他）文化」、「多（他）国籍」、「複数国家」、「（具体、一般を問わず）外国（語・人）」への言及、またはそれに類する語句、の有無とした。それに基づいて筆者は回答の類型化を行った。なお、1つないしは複数の設問が無回答のものについては、回答済みの設問のみ、有効回答にカウントした。

に関して、当該の1名は、「沢山の外国人が住んでいる」、「沢山の人種の人が住んでいる」、「たくさんの言語が話されている」、と思考の梯子を外国人－人種－言語へと積み重ねる。結果的に、筆者の期待通り、(複数)言語に目と思考が向けられる。次に、設問4に関して、当該の3名の内の1名は、「多国籍企業」、「マルチリンガル」、と回答している。(指示中でヒントとして出している)ホテルを思考の出発点にして、スウェーデン人、アイルランド人の出自が不明であるが故に却って目立つ彼らの外国属性を意識し、多国籍企業とこのホテルを結び合わせる。そこから一歩進んで、(そのような企業で当然求められる筈の)マルチリンガルな言語運用能力へと思考を展開している。また、設問5に関して、当該の4名の内の1名は、「髪が明るい色で無口な男はみなスウェーデン人と呼ばれていたと決めつけている」、「オランダ人が何かだというのははっきりしてない答え方をしている」、「スウェーデン人からすると、カウボーイの言っていることが理解できないため困惑している」、と会話を通して増長されるスウェーデン人に対する周囲の偏見を弁え、スウェーデン人の立場と自分を重ねて、言語の違い(を越えた意見の相違から生じる意思疎通の破綻にまで踏み込みつつ)へと思考を進めている。

ワークシート中の英文は学生の思考を活性化させる機能を果たしている。国際状況への気付きに対する学生の回答率を取り合わせて見る限り、筆者が概ね期待する、読者に思考させ(多様な思考の余地のあ)る、国際状況と外国語の関係性に気付かせる、教材としてCrane作品は有用と判断できる。この観点から、英文(1)～(5)に関して行われた前節の考察は的を射ていると言えよう。Crane作品(の中の英文)は21世紀のグローバル化社会只中の日本における「外国語」、とりわけ「英語」教育の現場での使用に耐える。加えて、英語文学の専門的知識を持たずとも、英語と複数の外国語が混在する国際状況を思考させる教材として活用できる、という確証が得られる。学生の全回答を見回すと、「グローバル」、「国際」という鍵文字がそれぞれ4つずつ見られた。少数派ではあるものの、この種の回答が「ある」という事実は見過ごせない。翻って、リアルタイムで直面していた筈の英語と複数の外国語が混在する国際状況を、19世紀末の(米国人)読者がCrane作品越しに意識していた根拠と見る。

これを踏まえて、作品が発表された19世紀末の(米国人)読者の意識の本質を見定める。合わせて、ワークシートを構成する英文(1)～(5)に関する前節の解釈をより補強する。その目的のために、短編“*When Man Falls*”から作家の教育的な意識の実態を探索する。同短編には、“*A Graphic Study of New York*”という副題が付けられている。そこに含まれる「調査報告」(study)という用語に着眼する。短編は(読者の教育を目的とする)調査報告書としての側面を持ち合わせる。その中で、NY市中の路上で話される「イタリア語」がわざわざ言及されている。作家はそれを「外国語」(foreign tongue)と言い切る(8: 348)。「よそ者」が使用するマイノリティ言語、とイタリア語をみなす米国人の認識が確認される。

同短編にはイタリア語(を話す人物)が登場する。しかし、それは物語が主題とする「倒れた

男の周りに集まる群衆の心理」と直接連動しない。確かに、イタリア語を話す男が路上で突然倒れる。しかし、イタリア語はその出来事の原因、結果のいずれとも無関係である。表題もまたイタリア語（人）と無縁である。「イタリア人」（the Italian）と草稿で一旦は造形した人物を、完成稿に至る際に単なる「男」（the man）へと作家は書き変える（8: 346, 350）。出自不明の人物が完成稿には現出する。伴って、「イタリア人」は作中から消え失せる。短編は、路上で転倒する（イタリア人と断定し辛い）イタリア語を話す人物に焦点を当てる。副題と取り合わせて、イタリア語がNY 市中の路上で話されている事実に力点を置く。このイタリア語話者はもはやイタリア人に限定されない。広く一般化される。この文章改変を通じて、＜イタリア人（＝ the man）＞が「米国内でイタリア語を話す」国際状況が浮かぶ。同時に、＜米国人（＝ the man）＞の間でイタリア語の使用が広がっていた事実が強く示唆される。

マイノリティ言語と優越言語がせめぎ合う様子を、米国の国際化の進展を背景にして同短編は描き出す。このせめぎ合いは、1890 年代の米国内で次々と設立される（米国人に外国語を教える）語学学校、「外国語」としての「イタリア語」を学ぶ米国人の知識欲、によって裏打ちされる（Berlitz 139, Back Cover）。この実情と絡んで、同短編におけるイタリア人不在の後ろには、複数言語の混在について考える材料を読者に提供する目的が潜む。その上で、（イタリア人に限定されない）イタリア語の使用を（米国人）読者に向けて「見せ」る。

この議論を補うために、設問 2 に対する学生の回答に立ち帰る。イタリア語で会話する「男と少年」を「イタリア人」と解する（誤答ではない、むしろ筆者が期待する）見解が多く寄せられた。実際、89 人中 27 人（＝約 30%）が「イタリア人」と答えている。一方、少数派ではあるが看過できない回答が散見されることにも触れておきたい。「イタリア人ではない」、「どちらかはイタリア人である」、「日本人である」、「イタリア語を勉強中」、「2 人の母国語はイタリア語ではない」、「通訳している」、「お互い母国語が違う」、と学生の幾人かは回答する。米国人が日常的に使用する「英語」は、「イタリア」的な Columbus と「世界」を標榜する万博に象徴される「国際」性の下、匿名の人物が発する「外国語（＝イタリア語）」によって浸食される。作家はその現場を短編で切り取る。（19 世紀末の）NY 市を飛び越えて、遍く米国の風景に混じるイタリア語について思考するよう読者は迫られる。上述した少数派の意見はまさにその要請に従う。

実際、同様の国際状況に今日の（日本の）読者は晒されている。グローバル化社会只中の 21 世紀で、日本（人）は依然として英語を「外国語」とみなす。日本（人）の閉じた共同体にとって、英語は「我が国の言語文化」を支える日本語とは相容れない「外国語」に他ならない（内閣府 217）。今日の日本で英語は未だ優越言語に成り得ない。この意味では、マイノリティ言語と同等視され得る。ところが、英語（というマイノリティ言語）が及ぼす影響から日本は畢竟逃れられない。設問 2 に対する先の少数派の回答からは、英文が書かれた 19 世紀末米国のイタリア語をめぐる国際状況を越えて、今日のグローバル化社会で、英語を母国語または優越言語としない人

も、「外国語」としての「英語」を身に付ける必要があること、「通訳」等の現場で英語（の運用能力）が求められること、に関して応用的に熟慮する学生の姿が浮かぶ。その思考の先で、19世紀末の（米国人）読者が外国語（＝マイノリティ言語）と対峙する国際状況と、これらの学生の回答は細い線ではあるが確実に交錯する。

関連して別角度から、同短編を掘り下げる。それは、万博の翌年、米国人の熱狂冷めやらぬ内に発表される。とすれば、“He uttered a low cry in his foreign tongue.”と「低く籠った叫び声」の形ではあるもののイタリア語を使用する「匿名の人物」（He）は万博と結び付けて読み解かれるのではないか（8: 348）。1892年、米国の雑誌にColumbusを特集した記事“The Columbus Celebration”が掲載される。その中で、Columbusは「イタリア（人）」と等号で結ばれる「彼」（He）で表される（187）。「彼」による＜アメリカ大陸発見＞以降、連綿と続く米国の発展を誇示する意図を万博は持つ（Davis 306）。この関係性を勘案するならば、短編中の「彼」は当時のイタリア（人）の代表者、Columbusに通じ得る。万博の主役は米国人であり、同時にColumbusでもある。この奇妙な二重性を抱える。イタリアと米国の結合の下、（作家が「外国語」と強調する「イタリア語」と連動して）「国際的」な米国が逆説的に形成される。

この逆説を伴い、米国人はマイノリティ要素＝外国（語）の視えざる影響下に置かれる。それが、“The Blue Hotel”の主人公として作家が選ぶ、非米国的な「スウェーデン人」の形を借りて噴出している、と見る。米国の国際化の萌芽は、1888年の英文法・英作文学習書に収録された内容的に適切な例文、“The French speak the French language.”、“The English speak the English language.”に確認することができる（Conklin 194）。例文から、「（言語）を話す」という意味の動詞speakの動作主と言語をセットにして交換する。それだけで、The Italian speak the Italian language. や The Swedes speak the Swedish language. という例文が成り立つ。更に、主体と言語の片一方を差し替えば忽ち、複数言語を操る人物が出現する。同書が掲げる別の例文、“That man speaks four languages.”とリンクする（42）。作家もこの複数言語空間に（フランス語の学習歴を持つ）同時代米国人の一員として身を置く。他方、外国語学習書は、巻末で別の外国語学習書を宣伝する（Berlitz 139）。作家は複数言語をめぐる同時代的な状況を、自作品越しに読者に「見せ」（教え）る（Wertheim & Sorrentino, *Correspondence* 29）。作家の教育者的な振る舞いはこの教材と見事に共振する。

「外国語」はマイノリティ言語であるが故に、異質さと多様性が目立つ。国際的な米国の姿を演出する。Riisは1890年のルポルタージュの中で、NY市中で生活する外国人の多様性を「虹の色」と「シマウマの縞模様」に喩えてみせる（25）。多様な外国人が多様な外国語を使用する。同年、雑誌に掲載された記事“The Typical American”は、匿名の「若い米国人女性」（a young American lady）を「国際人」（cosmopolitan）として例示しながら、「典型的な米国人」の絞り込みは極めて難しいと断言する（Lang & O'Rell 587, 589）。万博会場の中心の一画を、女性に「擬人化された米

国」をモチーフにした2つのモニュメントが占める。若い白人女性を象った「共和国の彫像」(the great Statue of the Republic)が(イタリアを連想させる)ローマ風の衣装をまとい高みから四方を睥睨する。(イタリア人 Columbus、の女性形で表される)同じく若い白人女性 Columbia を象った彫像が「コロンビアの噴水」(Columbia Fountain)の中央に鎮座して威風を放つ。両者は人工池を挟んで同一直線上に並ぶ (Flinn 22-25; 大井 59)。これらの彫像と相似形を描きつつ、American lady は万博に集約される米国の国際状況を先取りする。彼女は米国(人)と英語の優越的立場を代弁する。のみならず、万博に具現化される、米国(人)と Columbus を取り巻く国際性を表徴する。その旗印の下、米国では外国語(人)との混交が進む。「典型的な米国人」を探す際に直面する「躓き」は、伝統的な米国(人)像が機能不全に陥っている事態を仄めかす (Lang & O'Rell 589)。それを見直して、新しい規範に順応しなければならない時期に差し掛かっている。同じ時代に Crane は筆を取る。自作品を横断して、米国の国際状況を背景に「外国語(の影響力)」を反復的に前景化して「見せ」る。「外国語」の問題に巻き込まれ、同定し難い「典型的」な米国人に合致する作家の姿が見えてくる。彼の作品は、外国語に言及する箇所に着眼した読み直しと意味の付け直しを受け入れる懐の広さを持っている。その過程をなぞるワークシートの結果に照らすとき、19世紀末の(米国人)読者を越えて今日の(日本の)読者までも対象に含める、英語と複数の外国語の混在、その需要と受容の問題について思考させる英語で書かれた教材に Crane の作品は等しいと言える。加えて、Crane (の作品)は読者の思考を優越言語とマイノリティ言語の覇権争いの行方にまで誘う。

彼の短編の多くは新聞に掲載されて読者の許に届けられる。生活の断片を伝える「ニュース記事」的な役割を果たす。教材－文学作品－メディアという多面性を持つ。焦点化される外国語(=マイノリティ言語)は物語の本筋とは別に大事な機能を果たしていた(し得る)と言える。この文脈で、Maggie 冒頭部、NY 市中の悪童たちの間を飛び交う「罵声」を引き摺るかのように、いずれも新聞に掲載されている短編 “New York’s Bicycle Speedway”、“When Man Falls” の中で NY 市中の警官たちが吐く「悪口雑言」、1人の男がNY 市中で出す「低く籠った叫び声」、は同時代米国(のNY市)を象る「外国語」と重なり、相互に連結する (1: 7; 8: 348, 372)。意味を成さない、匿名の人物が発するこれらの「音」は外国語が米国で置かれていた状況を映す。と同時に、その無視し辛い存在感、米国の日常に溶け込む様相、を突き付ける。米国の新聞に掲載された語学学校の広告がそれを拡散させる (The Berlitz School of Languages)。

英語と外国語(に付随する外国人及び外国)の境界が、Crane が執筆活動を行う 19 世紀末米国で一層曖昧になる。それは(移民がもたらした)「混沌状態」の結果として、負の要素のみを帯びた訳ではない (Mayo-Smith 133)。設問 4 に対する学生の回答、「どんな人種も泊まれるホテル」、「どんな客でも歓迎してくれる」、「世界中の人が訪れるホテル」、「外国人旅行客歓迎」、からは国際状況を積極的に受容する(それをホテルの傾いた経営を立て直す効果的な手段として採用する)

姿勢が見て取れる。読者の思考を促す作家の教育的な試行の裏には、作家が読者と共有する（外国語に対する）嗜好、または国際化が進む米国で社会的なアドバンテージに成り得る外国語の運用能力の獲得志向、が複合的に潜むことは間違いない。1888 年の英文法・英作文学習書の例文は「4 か国語を操る人物」に触れる。それはその時代が求める「国際人」のアイコンとして適切に機能する（Conklin 42; Lang & O'Rell 587）。このアイコンは今日の日本が育成を謳う「グローバル人材」に通底する（内閣府 219）。複数言語に係る未来の眺望が想像／創造される。この「creativity」を土台に、「英語コミュニケーション能力育成」に不可欠な「相互交流」の展開が予感される（高橋 111, 115, 118）。ワークシート中の最終設問（＝設問 6）で、書き手の職業、生活環境、興味関心を、その正体を伏せて英文 (2) ～ (5) だけを基に学生に推察させた結果、「グローバルな人物」、「観察能力が優れている」、「他国の人物や文化に関心を持ち、勉学熱心な人物」、「言語学者」、「小説家」と（Crane を）解する回答が学生から出た。グローバルな視点を備える。他国の人物や文化に関心を寄せて熱心に観察する。言語に学問的に向き合う。作家としてこれらの要素を統合して英語文学作品を想像（創造）する。他方、教育者として読者の想像（創造）する力を喚起する英語文学教材の役割をそれに付与する。作家、教育者、creativity の三者に対する学生の気づきを、小論で唱えた仮説の着地点の妥当性を示す傍証としたい。

おわりに

効果的な「オーセンティック教材」として、英語文学作品の復権の是非が 21 世紀に入り早くも 20 年が経とうとしている今、改めて問われている（高橋 3）。この復権はある程度、20 世紀を代表する米文学作家 Ernest Hemingway（の短編＝英語文学作品）を全面的に活用する 2019 年の英文法学習書によって実現を見ている。「文法的な手がかり」を基に Hemingway 作品の「物語の謎」を解きつつ「英文法に関する知識を効果的に深め」る英語教材として、（外国語としての）英語を取り巻く日本の市場ニーズを掴む（倉林&河田 3, 6）。小論で検討してきた Crane 作品の教材化はこの試みとは別のアプローチを取る。けれども、先達による英語文学と英語教育の接合実践は小論の論議の正当性を裏付ける。合わせて、小論の独自性と応用性が担保される。

“The good writers are Henry James, Stephen Crane, and Mark Twain. That's not the order they're good in. There is no order for good writers.”、と Hemingway は Crane を優れた米文学作家に認定する（Hemingway 22）。彼は Crane（の作品）から直接間接的に影響を受けている（Robertson 178）。両者の関係性は、Hemingway 作品の果たし得る（得た）教育的役割が Crane 作品にも当て嵌まることを示唆する。小論は両者の連続性を発見し補強する。文学研究に考察の軸足を置きながら付帯的に Crane 作品を英語教育に活かす道を探索する。一連の方法論は広がりとお興行きを持つ。

例えば、小論の冒頭で示した Crane 作品と英文法・英作文学習書の例文の並置は、1888 年を作

家にとって転機の年と見る視座をもたらすとともに、「新しい」Crane 研究の地平を拓く。従来の枠組みから一寸離れて、Crane 作品を「外国語」という括りで組み直す。それによる教育的な相乗効果を見出す。21 世紀のグローバル化社会を見据え、英語と日本語の調和を取ろうと努める日本の教育の現場に Crane（の作品）を投じ、意味付け作業を行う。「英語（で書かれた文）」を通して（外国語と）国際性について思考する教材として捉え直すとともに、Crane（の作品）の今日性の発見に繋げる。^{注5} 検討すべき課題は残されている。1890 年代の米国は Columbus の業績を自らに重ねて振り返る万博の開催に沸き立つ。米国における外国語（＝マイノリティ言語）の 1 つ、「イタリア語」に Crane は頑なに固執する。小論を足掛かりに、その心情に隠された「イタリア（人）」、近過ぎるが故に却って視えない Columbus、の米国における需要（または受容）の本質を辿らなければならない。短編“New York’s Bicycle Speedway”の中で、複数言語を使い分ける警官たちの背後に“the Columbus monument”と表現される Columbus の立像を Crane は置く（8:372）。教育と外国語（と英語）が Columbus に重なり合う。2 つの彫像「共和国」、「Columbia」との関連性も見逃せない。この文脈で、米国の歴史自体を熟考させる教材として活用する視点－始点を、同短編は覗かせる。

今回のワークシートの結果は再活用され得る。別角度から回答を類型化し直す。その上で、個々の回答を改めて仕分ける。分類の網の目から零れ落ちるユニークな回答を拾い上げ、それが生じた要因、それが生み出し得る新たな着想点の検討が求められる。それらを通じて、Crane（の作品）の解釈の新たな広がりが見込まれる。設問 1 の回答の中に、「虹の色」の比喩を LGBT のシンボル、「レインボーフラッグ」と絡める回答が見られた。これは 19 世紀末米国の「国際と外国語」の問題系が今日の世界的な性の「多様性」をめぐる取り組みへと変奏され、両者が位相は違えども相似を描くことを強く暗示する。Riis は虹の色の比喩を移民（の問題）と絡める。Crane は Riis の影響を受けながらも、移民問題を越えて、米国における「外国語」の問題に教育的意図を伴い対峙する。LGBT はまた、彼（の作品）の今日性を探る新たな考察の扉を押し開ける視点－始点としても十分に期待される。

5 「あらためて現在の観点で独自の視線を投げかけ、アメリカ自然主義文学を読み直そうという試み」が近年進んでおり、その成果の一端を 2014 年に上梓された研究書に見て取ることができる（アメリカ自然主義文学研究会編 iv）。小論は、Crane（の作品）の再読を通じて現代の日本におけるその教育的有用性の是非を議論する。この点で、2014 年の研究書の中で展開される諸々の論考の延長上に位置する。

引用文献

- Berlitz, M. D. *Verb Drill: A Thorough Course in the French Verbs by Constant Practice in Conversation*. NY: Berlitz & Co, 1893.
- The Berlitz School of Languages. Advertisement. *New York Tribune* 7 August 1888: 6.
- Bowers, Fredson, ed. *The University of Virginia Edition of the Works of Stephen Crane*. Charlottesville: UP of Virginia. 10 vols. 1969-76.
- “The Columbus Celebration.” *American Advocate of Peace* 54.8 (1892): 187-88.
- Conklin, Benjamin Y. *A Complete Graded Course in English Grammar and Composition*. NY: American Book Company, 1888.
- Davis, George R. “The World’s Columbian Exposition.” *North American Review* 154 (1892): 305-18.
- Flinn, John J. *Official Guide to the World’s Columbian Exposition*. Chicago, 1893.
- Gullason, Thomas A. “The Sources of Stephen Crane’s *Maggie*.” *Philological Quarterly* 38 (1959): 497-502.
- Hemingway, Ernest. *Green Hills of Africa*. NY: Scribner’s, 1935.
- Lang, Andrew, and Max O’Rell. “The Typical American.” *North American Review* 150 (1890): 586-93.
- Mayo-Smith, Richmond. *Emigration and Immigration: A Study in Social Science*. 1890. NY: Scribner’s, 1898.
- Riis, Jacob A. *How the Other Half Lives: A Study Among the Tenements of New York*. NY: Scribner’s, 1890.
- Robertson, Michael. *Stephen Crane, Journalism, and the Making of Modern American Literature*. NY: Columbia UP, 1997.
- Senner, Joseph H. “The Immigration Question.” *Annals of the American Academy of Political and Social Science* 10 (1897): 1-19.
- Weatherford, Richard, ed. *Stephen Crane: The Critical Heritage*. Boston: Routledge and Kegan Paul, 1973.
- Wertheim, Stanley, and Paul Sorrentino, eds. *The Correspondence of Stephen Crane*. NY: Columbia UP, 1988.
- . *The Crane Log: A Documentary Life of Stephen Crane, 1871-1900*. NY: G.K. Hall, 1994.
- 阿部公彦『英語的思考を読む—英語文章読本Ⅱ』東京：研究社、2014。
- アメリカ自然主義文学研究会編『いま読み直すアメリカ自然主義文学—視線と探求』中央大学出版部、2014。
- 大井浩二『ホワイト・シティの幻影—シカゴ万国博覧会とアメリカ的想像力』東京：研究社、1993。
- 倉林秀男、河田英介『ヘミングウェイで学ぶ英文法』東京：アスク出版、2019。
- 高橋和子『日本の英語教育における文学教材の可能性』東京：ひつじ書房、2015。
- 高山宏『目の中の劇場』東京：青土社、1995。
- 内閣府『令和元年版 子供・若者白書』2019。
- 日本英文学会『第92回大会資料』2020。
- 増崎恒「英語文学と英語教育の接合—Ernest Hemingway の “Cat in the Rain” (1925) を事例として—」『国際教養学部紀要』第6号、追手門学院大学国際教養学部、2012年、pp. 59-78。
- 「＜模造＞ダイヤモンドは輝くか？—1890年代の米国の原風景に見る Stephen Crane、ダイヤモンド、アメリカ（人）、移民—」『国際教養学部紀要』第13号、追手門学院大学国際教養学部、2019年、pp. 11-28。